

## 恵迪寮『寮歌集』にみる欧米の学生歌の影響：明治から大正期にかけての収録歌からの考察

著者	下道 郁子
雑誌名	研究紀要
巻	42
ページ	109-135
発行年	2019-01-31
出版者	東京音楽大学
ISSN	0286-1518
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00001295/">http://id.nii.ac.jp/1300/00001295/</a>



# 恵迪寮『寮歌集』にみる欧米の学生歌の影響 —明治から大正期にかけての収録歌からの考察

下道郁子

## 1. はじめに

北海道大学の恵迪寮は昭和25年の旧制高等学校廃止後も残り、寮の歴史は前身校の札幌農学校開校の明治9年（1876）に始まる。この歴史ある寮で歌い継がれる寮歌の起源は、札幌農学校の寄宿寮が新築移転し〈恵迪寮〉と命名された明治39年（1906）まで遡る。翌年、同校は東北帝国大学農科大学予科<sup>1</sup>となり、この年から毎年寮歌が作られた。それから111年間、『寮歌集』は改訂増補版が発行され続け、今ではスマートフォンやパソコンに対応したアプリもある。

明治45年（1912）に発表された寮歌「都ぞ弥生」は旧制第一高等学校の「嗚呼玉杯に花受けて」、旧制第三高等学校<sup>2</sup>の「紅もゆる丘の上」と並び、三大寮歌と称される名寮歌である。しかしこの3曲を比較すると、「都ぞ弥生」が当時としてはかなり洗練された洋楽スタイルで作曲されていることがわかる。「嗚呼玉杯」は明治35年（1902）、「紅もゆる」は明治37年（1904）に作曲されており、「都ぞ弥生」との間に8～10年という年月が経ったことを考慮しても、「都ぞ弥生」の洋楽スタイルは、その頃確立したいわゆる〈寮歌スタイル〉とは一線を画するものである。この音楽的特徴は、農科大学予科<sup>3</sup>が他の旧制高等学校よりも、より西洋音楽の環境にあったことを示唆するのではないか。

また、札幌農学校は早くも明治33年（1900）にアメリカ歌由来の校歌「永遠の幸」を発表している。明治34年頃までの一高の寮歌が軍歌の替え歌であったことを鑑みると、札幌農学校がアメリカ歌の替え歌を校歌としたことは注目すべきことである。さらに、恵迪寮『寮歌集』には外国語の歌が3曲収録されている。寮歌の発祥である一高の寮歌集に外国語の歌は見られない。外国語の歌の収録も恵迪寮『寮歌集』の特徴である。

以上のことから、「永遠の幸」「都ぞ弥生」等を収録した恵迪寮『寮歌集』は、音楽的に貴重な資料と言える。本論では恵迪寮『寮歌集』の校歌から「都ぞ弥生」までの寮歌と、その前後に収録された外国語の歌に着目し、欧米の学生歌の影響を探求する。欧米の高等教育をモデルとした旧制高等学校の教育と文化的背景が、明治から大正にかけて発表された歌にどのように

1 明治40年から大正7年までは東北帝国大学農科大学予科が正式名称である。本論では以後「農科大学予科」と記す。

2 本論では以後「一高」「三高」と記す。

3 本論では以後「予科」と記す。

反映しているのかを考察し、明治時代に他の旧制高等学校とは異なる寮歌「都ぞ弥生」を生み出した恵迪寮『寮歌集』の特性を明らかにしていく。

## 2. 先行研究と本研究の方法

国内の寮歌研究は、高橋佐門『旧制高等学校の研究、寮歌、校風論篇』（1978）や寮歌の楽譜と解説を掲載した『寮歌は生きている』（1966）等がある。また拙論に「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動」（2007）「大正時代の第一高等学校の寮歌の研究—旧制高校の教育と音楽的側面からの検討」（2009）、「寮歌の形成過程と文化的背景—〈花は櫻木〉から〈都ぞ弥生〉まで」（2013）等がある。ドイツ学生歌に関してはラング・長友『ドイツ学生歌の世界—その言語文化史的断面—』（1999）がある。国外では旧制高等学校の学生文化を研究した D. Roden の *Schooldays in Imperial Japan—A study in the Culture of a Student Elite*（1980）やアメリカの学生歌を歴史的に概観した J. L. Winstead の *College Song*（2013）がある。しかし旧制高校寮歌を欧米の学生歌と比較した研究や、音楽面に焦点を当て、欧米の歌集の楽曲の構造や歌唱実践の分析を系統的に行った研究はない。

「都ぞ弥生」に関しては拙論「七大学をめぐる歌—都ぞ弥生 前編、後編」（2011, 2012）で、作曲過程について述べた。また山口哲夫編『都ぞ弥生』（1974）に、同窓生や関係者の回想による事実確認や思い出などが紹介されている。しかし音楽面から、農科大学予科の文化的背景や教育理念を探ろうとした研究はない。

## 3. 黎明期の恵迪寮『寮歌集』

恵迪寮『寮歌集』は、札幌農学校時代の校歌「永遠の幸」から大正5年（1916）までの寮歌を収録し、同年に発行された。『恵迪寮寮史』には、寮の委員会で寮歌集発行を決定し序文を教官の橋本左五郎と休職中の有島武郎に依頼したこと、有島の実稿が遅れて印刷に間に合わなかった等の顛末が記載されている<sup>4</sup>。

寮史に正式な記載はないが、この『寮歌集』に先立つ明治44年（1911）4月8日発行の寮歌集が見つかる。最終頁に「（明治四四年） 二千五百七十一年四月八日 第六回世紀念日発行（非賣品）恵迪寮」と記されている。所蔵は「佐藤昌介記念文庫」で、収録歌は明治40年の「一帯ゆるき」（1907）、同41年「大虚の齡」（1908）、同42年「希望の光」（1909）、同43年「帝都を北に」（1910）、同44年「藻岩の緑」（1911）の5曲である。右頁に歌詞、左頁に数字譜が

---

4 恵迪寮寮史編集委員会『恵迪寮寮史』（1933）p. 398

記されている。

恵迪寮『寮歌集』には「流転永劫の死点に立てる人々の為に」と献詞が付されてある。これは大正9年（1920）頃に寮歌集校正の折に書き加えられたようである<sup>5</sup>。旧制高等学校の寮歌集にこのような献詞が付いているのは稀である。

旧制高等学校の寮歌集には、毎年の記念祭で発表される各寮の寮歌以外に、応援歌、部歌など様々な歌が収録されている。恵迪寮『寮歌集』にも付録の部に、桜星会歌、文武会歌、応援歌、外国語の歌、開校祝賀の歌、帝大独立記念歌、ストームの歌、運動部部歌が収録されているが、中でも特徴的なのが外国語の歌の掲載である。例えば一高の寮歌集に外国語の歌はない。三高の寮歌集には2曲あるが作曲作詞者不詳である。1曲はイギリスの Harrow School の歌の転載、もう1曲は明治20年頃歌っていたらしいという、かなり簡素な歌である。恵迪寮『寮歌集』の外国語の歌は“Studenten Lied”、“Marching Song”、“College Hymn”の3曲である。作詞者と作曲者は予科の教員で、同校のみならず札幌の文化に影響を与えた人物である。

次項からは校歌「永遠の幸」、黎明期の寮歌5曲、外国語の歌、「都ぞ弥生」に焦点を当て、音楽的要素を中心に分析と考察を進めていく。

## 4. 校歌「永遠の幸」（譜例1）

### 3.1 原曲 “Tramp Tramp Tramp”

校歌「永遠の幸」は有島武郎在学中の明治33年に作られた。作詞は有島武郎で校閲は大和田健樹（1857-1910）、選曲は納所弁次郎（1865-1936）である。大和田は「鉄道唱歌」の作詞をした国文学者である。納所は「桃太郎」「兎と亀」「鉄道唱歌第4集」等を作曲し、学習院等で教鞭をとった作曲家、音楽教育家である。一見、明治の唱歌作詞作曲家による歌のようであるが、原曲はアメリカの歌 “Tramp Tramp Tramp” である。また歌詞も若者の大志と校風を歌いあげた寮歌詞風で、在校生有島の作ということからも、寮歌の定義である「寮歌とは、寮生活を中心に、寮生により作られ、歌われた歌」<sup>6</sup>に近い作歌過程を経ている。

原曲 “Tramp Tramp Tramp” はアメリカの南北戦争中にソングライター George F. Root（1820-1895）によって1864年に作詞作曲された歌である。捕虜の希望を歌った戦いの歌で、親しみやすいメロディから、実に多くの歌詞が付され替え歌となって欧米に普及した。日本でも同志社大学のラグビー部の歌「若草萌えて」（明治44）に用いられている。おそらく外国人教師から伝わったと考えられる。

George F. Root はマサチューセッツに生まれた福音派のクリスチャンである。彼はアメリカ

---

5 『寮歌集』（2011）「附録」p. 98

6 高橋左門『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』p. 4

の音楽教育の父と言われるローエル・メーソン (Lowell Mason 1792-1872) と共に、音楽を通して改革運動を行った。Root はベスタロッチ主義の音楽教育を行う中で、単純な旋律を歌うことが、生徒の感情面だけでなく知性的な反応にも、より効力があることを確信していた。一族で Root&Cady という出版社を経営し、多くの歌曲を販売した。南北戦争時代のアメリカで人気を博した歌は主に軍歌、愛国歌、哀愁歌、ミンストレルなどで、songster という歌集で人々に携帯された。

“Tramp Tramp Tramp” は足をふみ鳴らす擬音で、明日に希望を持って前進する気持ちを表現している。1865年までに約1万部売れたという。軍人や捕虜だけでなく、一般市民や南部連合の州でも愛唱された。南北戦争時下の代表的な闘いの賛歌-Battle Hymn-である。

#### (ア) 楽曲の特徴<sup>7</sup>

調性、拍子、音階構造、形式など、音楽面の基本的な特徴を以下に列挙する。

- ・ アウフタクトで始まる。
- ・ 変口長調<sup>8</sup>で全音音階の長音階による旋律。
- ・ 速度は四分音符＝約88で中庸なテンポ。
- ・ 曲想表示はなし。
- ・ 拍子は4分の4拍子。
- ・ 全体は A (1-8小節) B (9-12小節) A' (13-16小節) の3部分形式で16小節。
- ・ 2小節ごとのプレス。

明治33年という時代背景を考えると、アウフタクトで始まっていること、第4音と第7音を含む全音階による旋律であることに注目したい。アウフタクトも全音階も、日本の伝統的な音楽にはない構造である。明治時代の一高の寮歌、及び三高の寮歌で、アウフタクトで始まるものはない。また、一高で初めて全音階の寮歌が作られたのは明治37年(1904)である<sup>9</sup>。

アウフタクトで始まるため、冒頭の小節の前に開始音が飛び出る。アウフタクトに日本語を乗せると、不自然な位置に言葉のアクセントがつくので、日本語の抑揚やリズムを重視した歌には不適切である。「永遠の幸」でも、「とこしえの」の「し」が強拍になっている。『小学唱歌集』収録の「仰げば尊し」「蛍の光」もアウフタクトで始まるが、前者はアメリカの賛美歌、後者はアイルランドの民謡が原曲である。

歌詞の型にも注目すべき特徴がある。この時期の唱歌、軍歌、寮歌の歌詞が七五調であるのに対し、有島作の歌詞は七五調ではない。五七調でも八七調でもなく、詩句の語数や配列の順序に一定の規則性を持たない不定型詩である。これは有島が曲のリズムを考慮して、日本語の歌詞を作成した為と考えられる。

7 本論の楽曲分析には平成23年(2011)版の五線譜を用いる。

8 昭和3年版の数字譜では変ホ調と書かれている。

9 下道郁子「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動」(2007) p.44

また歌唱スタイルにも特徴がある。前半（A）は独唱又は斉唱、後半（BA'）は合唱となっており、主唱とそれに対する応答という歌唱スタイルである。これは南北戦争の Battle Hymn に多用された歌い方で、有名な「リパブリック賛歌」もこのスタイルである。この応答する形で合唱するスタイルは、黒人の労働歌である Plantation Song に特徴的な歌い方でもある。北海道大学の蔵書に Plantation Song があり<sup>10</sup>、農業を専門とする札幌農学校では Plantation Song についても知っていた可能性がある。このような意味でも校歌「永遠の幸」には、クラーク博士が関係した南北戦争と、校長を勤めたマサチューセッツ農科大学アマースト校の教育理念が、投影されていると考察できる。

## 5. 「都ぞ弥生」までの寮歌の傾向

### 5.1 作詞作曲過程

校歌発表から7年後の明治40年（1907）に寮歌募集と寮名募集が行われた。寮歌の作成過程については、『都ぞ弥生』（1974）の「後編 北大寮歌について」に関係者の回想が書かれている。それによると、明治40-41年（1907-1908）の寮歌は選挙で選ばれた寮歌委員の合作である。委員を作歌と作曲に分担し、各分担も複数の委員で構成されていた。チームによる協議の合作であったようだ。寮生一般から募集したのは明治44年（1911）「藻岩の緑」からである。歌詞は寄宿係であった有島武郎の校閲を受けた。

最初の寮歌「一带ゆるき」（譜例2）の作曲者として名前が記されている高松正信は作曲過程を次のように述べている<sup>11</sup>。

寮歌のことは、はずかしくて書けたものではないがその当時の上級生で本譜を読めるのは私しかいなかったし、寮のオルガンで American Popular Songs などという歌集を見てブウブウ鳴らしていたものだ。そういうことや当時だれもやる者がいないので私が「軍艦マーチ」や「ラ・マルセユ」などをゴチャゴチャにして作っただけのものである。

音楽のアイディアをアメリカの歌集や、フランスの国歌、当時流行していた瀬戸口藤吉（1868-1941）の軍艦マーチ（1900）に採した苦勞が窺われる。

### 5.2 楽曲の特徴

恵迪寮寮歌第1号の「一带ゆるき」の音楽構造は、アメリカ歌を原曲とした校歌の影響を全

---

10 Hampton and its students/by two of its teachers, M. F. Armstrong and Helen W. Ludlow : with fifty cabin and plantation songs, arranged by Thomas P. Fenner

11 『都ぞ弥生』（1974）p. 167



く受けず、一高の「嗚呼玉杯」や三高の「紅萌ゆる」に準じる寮歌スタイルである。この傾向は「都ぞ弥生」発表前年の「藻岩の緑」まで基本的に同じである。ヨナ抜き五音音階が基調で、8小節単位が3回現れる24小節構成、形式としてはAA'A"の三部分形式である。「永遠の幸」のような4分音符や2分音符の連打はなく、一貫して付点音符と短音のピョンコ節というリズム型である。歌詞は全て七五調の定型詩である。

「一帯ゆるき」に第4音が2回<sup>12</sup>、「太虚の齡」に第7音が1回<sup>13</sup>、「希望の光」に第4音が4回、第7音が2回用いられ、完全な五音音階ではない。「帝都を北に」「藻岩の緑」は完全な五音音階である。明治40年から42年までに発表された3曲の寮歌が完全な五音音階ではないことは注目に値する。

## 6. “Studenten Lied”（譜例3）

### 6.1 作詞者ハンス・コーラー

この曲は明治末期から大正にかけて作られたと考えられている。ハンス・コーラー Hans Koller (?-1925) は、明治41年から予科でドイツ語を教えたスイス人教師で、大正14年(1925)に在職中に亡くなった<sup>14</sup>。コーラーは日本に一本杖のスキーを紹介し、これが日本の冬の遊び、スポーツとしてのスキーの始まりとも言われている。このコーラーだが、明治44年に農大基督教青年会の大会でドイツの学歌“Jägerlied”を歌った記録がある。以下『北海タイムス』明治44年4月3日の記事を元にプログラムを表1にまとめる。

また、この音楽会の評が、『北海タイムス』明治44年4月5日の記事「音楽會局外評」として掲載されている。以下、一部を引用する。

第一部一、カレッチソングのユッハイデーは、勇壮活潑で米国カレッチ、スチューデントの風俗の一般を偲はせ、二、ローランド氏のピアノ獨奏曲は何か知らぬが弾指の力強きを感じしめ、三、イエーガーリドは學生グリークラブ員諸氏が困難な獨逸語をよくあれ丈に唱いこなしたと感服せしめ…中略…七、<sup>15</sup>男聲部合唱ラインの守り有名な獨逸の國歌で豪壯を以って聞こゆるものステッドマン、コーラー、リープ、ローランド四氏の咽喉には好恰なもの（以下省略）。

「イエーガーリド」とはドイツ語の Jägerlied の日本語読みであろう。ドイツの学生団体

12 昭和3年(1928)版の数字譜では1回である。

13 昭和3年(1928)版の数字譜は「と調」と記されている。

14 『寮歌集』『付録』(2008) p. 33

15 おそらく「九、」の間違い

である学士会 (Studentenverbindung) には、伝統的な学生儀式に狐狩りある。学生歌集 *Allgemeines Deutsche Kommersbuch* (1974) には “Lustig ist die Jagerei” という項目があり、6 曲の狩の歌が掲載されている。1807年作が1 曲、1827年作が1 曲で、1843年作が2 曲あり、明治44年の農大基督教青年会の大会でどの曲を歌ったかは特定できない。ちなみに恵迪寮では、明治44年10月に定山溪への旅行を中止して、初めて兎狩りを催した。以後兎狩りが年中行事となった。

「男声の四部合唱ラインの守り」に登場するローランドは後述する “Marching Song” と “College Hymn” の作曲者である。「ラインの守り」はドイツの愛国歌で、第一次大戦前は *Allgemeines Deutsche Kommersbuch* に収録されていた。旋律はイエール大学や同志社大学のカレッジソングにも使われている名曲である。明治20年代の一高の音楽会でも歌われ、例えば明治26年 (1893) のプログラムに唱歌として載っている<sup>16</sup>。また「本校教師 (外国人) が好んで口笛をふいている」と当時の学生が語っており、一高ではかなり愛好された歌のようである<sup>17</sup>。

## 6.2 曲譜 “Jupidei” の楽曲の特徴

“Studenten Lied” の作曲者の記載はなく、「Jupidei の譜」と書かれている。『寮歌集』(2008) には “Jupidei” は「1845年の Urbummellied (譜例4) (G. Weber 作詞、R. Schaffer 作曲) 作曲が元歌と推定される」と記載されている<sup>18</sup>。*Allgemeines Deutsche Kommersbuch* 1の1888年版では “Urbummellied”、1974年版では項目 “Ich wander in die weite Welt” の中の曲で “Studio auf einer Reis” というタイトルで掲載されている。タイトルが異なるが、1888年版も1974年版も曲譜は同じである。いわゆる青年の〈さすらいの歌〉である。人生を謳歌する学生の様が歌われている。歌詞で歌われる “Juchheidei” は掛け声で特に意味はない。

『寮歌集』の “Studenten Lied” では、“Juchheidei” の掛け声は前半のみ “Tralala” になっている。「札幌」「琴似」「運動会」「万歳」「餅」「饅頭」「落第」などの日本語が散りばめられ、最後に「仕方がない」と締めくくっている。予科の学生の気持ちに寄り添った歌詞である。ここでは音楽的特徴を以下に列挙する。

- ・アウフタクトで始まる。
- ・ト長調で全音階の長音階による旋律。
- ・速度は四分音符 = 約92の軽快なテンポ。
- ・Munter bewegt (快活な動きを持って) の曲想表示。
- ・4小節 × 5の20小節構成で形式は AA'BCC'。
- ・拍子は4分の2拍子。
- ・旋律は最大短7度の跳躍 (3小節目のレ→ド) がある。

16 下道郁子「寮歌の形成過程と文化的背景—〈花は櫻木〉から〈都ぞ弥生〉まで」p. 27

17 前掲書 p. 38

18 『寮歌集』「付録」(2008) p. 33



- ・ 11小節目のド#でニ長調（5度調）の借用和音を使い12小節目で半終止。
- ・ 4小節ごとのプレス。
- ・ 旋律は跳躍音程が多く、動きがある。
- ・ ハーモニー（和声）はフレーズ（4小節単位）ごとに、I（トニック）V（ドミナント）I（トニック）の繰り返しで、単純明快な曲調。

有名なドイツの学生歌の転用であるが、当時の日本人にとって正しい音程をとるのは、かなり難しかったのではないかと推測する。ハーモニーがI→V→Iと単純なので、四部合唱でも歌える和声構造である。先述した明治44年の農大基督教青年会の大音楽会で「カレッジソング(校歌) ユツパイデー」と演目にある。また先に引用した『北海タイムス』明治44年4月5日の評で「勇壮活潑で米國カレッジ、スチューデントの風俗の一般を偲はせ」と書かれている<sup>19</sup>。札幌でもポピュラーな歌であったことが伺われる。

## 7. “Marching Song”と“College Hymn”

### 7.1 作曲者ポール・ローランド

ポール・ローランド (Paul Rowland 生没年不明) は、大正3年から6年(1914-17)まで農科大学予科で英語を教えた人物である。大正3年頃、農科大学で独立教会系のグリークラブという音楽研究会が生まれたが、そのメンバーでもあった。彼の父は明治29年(1896)に札幌組合基督教会に着任した宣教師のジョージ・ミラー・ローランド (George Miller Roland 1859-1941) である。賛美歌の指導に熱心な音楽に堪能な人で、日本の唱歌教育や札幌のコーラスに多大な影響を与えている。ジョージ・ミラー・ローランドの初来日は明治19年(1886)で、岡山と鳥取に滞在した。鳥取協会時代に、彼は文部省唱歌「故郷」の作曲家として名高い岡野貞一(1878-1941)に音楽を教えている。岡野の母芳江に、明治27年(1894)にローランドが授業した記録も残っている<sup>20</sup>。ジョージ・ミラー・ローランドの指導の下に賛美歌を歌っていた人々により合唱団が結成され、明治42年(1909)に札幌声楽会が発足した。この会は大正になると器楽も加えて札幌音楽会、そしてサッポロフィルハーモニーソサエティーと発展していく。ジョージ・ミラー・ローランドの合唱団では、日本語でヘンデル (Georg Friedrich Handel 1685-1759) のハレルヤコーラスを歌い、大成功を博したという。この合唱団で足踏み式のオルガンで伴奏を務めたのが、息子のポール・ローランドであった。父子ともに外国人とわからないほど日本語が巧みであったという<sup>21</sup>。

19 『北海タイムス』明治44年4月5日の記事「音楽會局外評」

20 前川公美夫『北海道音楽史』大空社 1995 pp. 62-63

21 前掲書 p. 165

父ジョージ・ミラー・ローランドに比べ息子のポール・ローランドについては、資料が少ない。しかし、彼は、大正5年(1916)に *A TEXT BOOK OF PRACTICAL ENGLISH* という英語の教科書を出版している。表紙に記された著者名は“PAUL ROWLAND, M. A.(HARV.) PROFESSOR OF EENGLISH IN THE TOHOKU IMPERIAL UNIVERSITY COLLEGE OF AGURICULTURE”となっている。

## 7.2 *A TEXT BOOK OF PRACTICAL ENGLISH* 掲載の歌曲

この英語の教科書の中に、トニック・ソルファの譜で5曲の歌が掲載されている。d-r-mのアルファベットによる譜の上部に“TONIC SOL-FA”と記されているが、これは唱歌法を示したものである。トニック・ソルファは、19世紀にイギリスでは考案され普及した、音符ではなくアルファベットを用いた記譜による音程練習法のことである。数字譜記載の曲目をみると、アメリカ国歌、民謡、愛国歌、頌歌等である(表2)。

“AMAERICA”はアメリカ国歌で別名“My Country, 'Tis of Thee”で作詞はSamuel F. Smith(1808-1895)である。メロディはイギリスの典礼歌が原曲の“God Save the King (Queen)”である。

“HOME SWEET HOME”は日本では「埴生の宿」のタイトルで知られている。作詞はアメリカのJohn Howard Payne(1791-1852)、メロディはイギリスのHenry Rowley Bishop(1786-1855)の作曲である。“BRUCES BATTLE SONG”は別名“Scots Wha Hae”でスコットランドの国民的詩人Robert Burns(1759-1796)によるスコットランドの愛国歌である。メロディはスコットランド民謡“Hey Tuttie Tatie”を用いている。

“THE MINSTREL BOY”はアイルランドの国民的詩人Thomas Moore(1779-1852)の詩でやはり愛国的な内容である。メロディはアイルランドで古くから知られている“The Moreen”を用いている。

“ODE from the SPECTATOR”はJoseph Addison(1672-1719)の作詞による賛美歌で日本語訳は「果てなき大空」である。ハイドン(Franz Josef Haydn, 1732-1809)の“Creation”、日本語では、オラトリオ「天地創造」の第13番の合唱“Die Himmel erzahlen die Ehre Gottes”が原曲である(譜例5)。

## 7.3 ポール・ローランドと音楽

『北海タイムス』の「音楽會」においても、ポール・ローランドは、ピアノの独奏、独唱、そして四部合唱と大活躍している。父ジョージ・ミラー・ローランドの影響もあり、音楽の専門的な知識や演奏能力を備えていたと考えられる。また、自著の英語教科書には、愛国的な歌詞を教材にしながら、イギリス、アメリカ、ドイツの歌を掲載している。トニック・ソルファ法を用いる等、あたかも音楽の授業と合体したような、英語の授業が行われていたことを伺わせる教科書である。当時の予科の教育環境が、少なくとも、語学教育においては、かなり音楽

的に豊かであったと推測できる。

#### 7.4 楽曲の特徴

英語教材に、歌を取り入れたポール・ローランドが作った学生歌2曲にはどのような特徴があるのだろうか。

##### (1) “Marching Song” (1915) (譜例6)

大正4年に作曲されている。タイトルから、運動会や兵式体操の行進で歌われたと推測される。音楽的特徴を簡条書きで列挙する。

- ・ アウフタクトで始まる。
- ・ ハ長調で全音階の長音階による旋律。
- ・ 速度は四分音符＝約104の速めの行進曲。
- ・ Resolutely (断固として) の曲想表示。
- ・ 4小節×4の16小節構成で形式はABA'C。
- ・ 拍子は4分の4拍子。
- ・ 旋律は順次進行による下降と上行の反復。
- ・ 2小節ごとのプレスと休符。
- ・ 14小節目の1-3拍目 cheer, cheer, cheer にアクセント記号が付けられている。
- ・ 15小節目に Broadly (幅広く) の曲想記号がある。
- ・ 最終小節に最後の2音 frien-ding にアクセントが付けられている。

アクセントの箇所は、恐らく足を踏み鳴らして行進すると考えられる。「永遠の幸」の原曲の“Tramp, Tramp, Tramp”が足を踏み鳴らす行進歌であったことを鑑みると、校歌の伝統を受け継いだ曲と言える。

##### (2) “College Hymn” (1916) (譜例7)

大正5年に作曲されている。タイトルの通り、歌詞は農科大学を讃える内容である。熱意ある若者と森の中のアカデミーを〈北のアテネ〉と誇らしく歌っている。そして第3番の歌詞“hail to Kuroda and Clark, The boys of '80 and '81!”は、黒田清隆(1840-1900)とクラーク博士(William Smith Clark 1826-1886)、そして第1期、第2期生の青年達のことであろう。黒田清隆は開拓使長官として北海道の殖産事業の為に外国人招聘の道を開いた。第1期生は佐藤昌介(1856-1939)、大島正健(1859-1938)、伊藤一隆(1859-1929)、第2期生は新渡戸稲造(1862-1933)、内村鑑三(1861-1930)、宮部金吾(1860-1951)等で、彼らは札幌を超え、近代日本の発展に尽力した錚々たるメンバーである。

音楽的特徴を以下に列挙する。

- ・ アウフタクトで始まる。
- ・ ハ長調で全音階の長音階による旋律。

- ・速度は四分音符＝約69の穏やかなテンポ。
- ・Heartlily（快活に）の曲想表示。
- ・4小節×3に2小節を加えたの14小節構成で形式はAA'A''+コーダ（終結部）。
- ・拍子は4分の4拍子。
- ・1～4のカッコ（ㄣ）を用いた反復記譜。
- ・14小節目にBroadly 曲想表示。
- ・第4番のみ3小節を加えた15小節構成でコーダが強調されている。
- ・15小節目にSpiritedly（決然とした）の曲想表示と、2分音符のラ→シ→ドの上行による曲の力強い締めくくり。
- ・旋律には最大長6度の跳躍（9から10小節のド→ラ）がある。
- ・4小節目のファ#でト長調（5度調）の借用和音による半終止。
- ・2小節ごとのプレス。

全体に3度、4度、5度の跳躍があり、音程を正しくとるのは難しい旋律である。臨時記号#を用いた5度上への転調による半終止は、曲をより洗練された西洋スタイルの音楽にしている。記譜もカッコ付き反復を用いるなど、西洋音楽理論の知識を必要とする。コーダで盛り上げるところなど、西洋音楽の手法である。

## 8. 「都ぞ弥生」の特徴と外国語歌曲との関連

「都ぞ弥生」までの校歌と寮歌、及びその前後に収録された外国語の歌と、それに纏わる教育環境について考察を行ってきた。その結果「都ぞ弥生」が作曲された頃の予科の文化的背景が漠然とはあるが浮かび上がってきた。以上の考察を背景に、「都ぞ弥生」の特徴を分析していきたい。

### 8.1 作詞作曲の過程

「都ぞ弥生」が当時の他の寮歌に比べて特異と考えられることに、作詞作曲の過程がある。多くの寮歌が、まず歌詞を募集して選び、音楽に素養がある学生に作曲を依頼するという過程をとったのに対し、「都ぞ弥生」は詞と曲が同時に、つまり作曲者と作詞者が双方向で行った合作である。既に拙論「七大学をめぐる歌—都ぞ弥生」<sup>22</sup>で書いたが、作詞を担当した予科2年生横山芳介と作曲を担当した予科2年生の赤木顕次の言説が残っているため、作詞作曲の過程は詳しく知ることができる。横山の遺稿ノートには歌詞に先立って「恵迪寮第六回目の寮歌を三月二十六日の朝漸く作り了った。人の批評はどうでも自分はかなりの努力を以て此歌を作っ

---

22 下道郁子『U7』vol. 41 December, 2011 pp. 64-69

たのであることを以て慰みとする」と記されている。作曲を担当した予科2年生の赤木顕次は「作詞の感動が非常によく、人をチャームする力があつたのと、私と彼とは同室のよしみで、作詞の気に入らぬところがあれば、遠慮なく直す事ができると思うたので、やってみようという気になった」と、作曲の動機を述べている。同級生から、「このままではいけない、音楽学校へ送って直してもらった方がよい」と忠告されるが、赤木は「人が直すなら、絶対に発表しない」と応え、当時は「それほど自信満々であった」と回想している。落第、留年となった。赤木は寮を出てオルガンのある家に下宿し、学校はサボって作曲に熱中、横山も六月の学年末試験に落第、留年となっている。

後年横山は「…歌のあとから譜をつけたのでなくて、歌に沿うて譜が出来、また譜に沿うて歌が出来、いわば二つのものの中に同じ気持ちが流れているということが、この歌がうたいよく、みんなに喜ばれる理由じゃないかと思う。」と語った。赤木は「横山芳介とさんざん喧嘩した」と思い出を語っており、「都ぞ弥生」は歌詞と曲が同時に作られた合作といえる。完成すると、寮の集会室の壁に大きな文字で書いた詩を掲示し、寮生達は赤木のオルガンで合唱の練習を行った。

## 8.2 楽曲の特徴（譜例8）

「都ぞ弥生」は明治時代の寮歌としては、とりわけ洋楽スタイルの楽曲である。発表当時は「歌い難い」とか、「賛美歌風でしめっぽい」と人気がなかったが、この不評は洗練された洋楽スタイルであったこと、そしてそれが当時の日本人には受け入れ難かったことを物語っている。

- ・ニ長調で五音音階・ヨナ抜き長音階による旋律。
- ・ニ長調の主和音である〈レーファ#ーラ〉で始まる旋律で明確に調性を提示。
- ・〈レーファ#ーラ〉の音型が6回も現れ、主要なモチーフとなっている。
- ・速度は四分音符＝約90-100の自由なテンポ。
- ・Maestoso（荘厳な）の曲想表示。
- ・（4小節×2）+（4小節×2）+（4小節×3）+6小節の34小節構成で形式はAA'BB'CC'C"A"。
- ・拍子は4分の2拍子だが、17～20小節目で、各小節ごとに拍子指示があり4/4→3/4→4/4→3/4と変化する。
- ・16、20、24、28小節目の最後の音の2分音符にフェルマータ記号。

現在普及している「都ぞ弥生」の録音には、四部合唱で賛美歌風に歌われる演奏が多くあり、寮歌風ではないと批判されることもある。しかしこれは逆に考えれば、賛美歌風の構造を持った曲と解することができる。また、主要なモチーフがあること、それが核となって曲全体を構成している点、曲想表示があること、開始部分のAがA"となって再現されることで曲に統一感を与えている等、西洋の音楽理論や構造に乗っ取った作りである。拍子が小節ごとに変わるCC'C"部分は印象的なリズム感を醸し出し、前半のABに対する応答のようにも聞こえる。Plantation song や Battle Hymn に通じるような曲構造、歌唱スタイルである。

### 8.3 八七調の歌詞と早稲田大学校歌

「都ぞ弥生」の歌詞は八七調で、この詩型が当時の他の寮歌と一線を画する歌を作りあげた。当時の寮歌は七五調が典型で、一高の「嗚呼玉杯」は七五調六行、三高の「紅もゆる」は七五調四行であるが、「都ぞ弥生」は八七調七行＋五七五調一行による五節である。しかし明治40年代には、詩壇では既に八七調が影響力を持っていた。例えば明治40年に発表された早稲田大学の校歌「都の西北」は八七調である。

早稲田大学の校歌については、東の『学生歌とその時代』（2006）や早稲田大学校歌研究会が作成したDVD『校歌100年』に作曲背景等が詳しく記されている。「都の西北」の作詞者は相馬御風（1880-1950）で、早稲田の哲学科を卒業後、三木露風（1889-1964）らと早稲田詩社を設立し、口語による自由詩運動を進めていた。坪内逍遙（1859-1935）と島村抱月（1871-1918）が開講25周年記念の式典に向けて校歌を制定しようと詩を公募したが、適切な作品が集まらず、作詞を依頼することにした。在学中の北原白秋（1885-1942）も候補にあがったが若輩ということで、相馬に依頼された。

「都ぞ弥生」が明治45年発表という年代を考えると、当時流行していた早稲田大学の校歌「都の西北」の影響を受けたことも想定できる。タイトルも酷似しているが、「都ぞ弥生」と「都の西北」にはどのような類似点と相違点があるのだろうか。

### 8.4 「都の西北」の楽曲の特徴（譜例9）

「都の西北」の曲は、東儀鉄笛（1869-1925）に依頼された。東儀は宮内省式学部の要職にありながら、早稲田で学んだ人物で、坪内逍遙の「文芸協会」にも加わり、新劇俳優としても活躍した。相馬と東儀は共に欧米の学生歌を研究して作成を進めたという。

楽曲の特徴を以下にあげる。

- ・アウフタクトで始まる。
- ・ニ長調で七音音階の長音階による旋律。  
〈ファ#-ソーラ〉の音型が9回も現れ、主要なモチーフとなっている。
- ・速度表示はなし。
- ・「元気をもって」の曲想表示。
- ・（4小節×2）＋（4小節×2）＋（4小節×2）＋4小節の28小節構成で形式はAA'BB'CC'C"D。
- ・「わせた」を繰り返す最後の4小節はコーダの役目を担っている。

「アメリカの大学の校歌とそっくり」と評された「都の西北」は、モデルとした曲が“Old Yale”ではないかと言われている。“Old Yale”は *CARMINA COLLEGES* という英語とドイツ語の学生歌集にのっている。更にこの“Old Yale”の原曲が“Brave Old Oak”という古いイギリスの歌であることまで、突き止められている。

早稲田大学は、七音階の当時としては最先端の西洋スタイルの校歌を誇りにしてきた。しか



し、原曲が“Old Yale”とわかり、オリジナルの校歌を作り直すべきではないかという議論が起こった。だが校歌研究会が調べる中で、“Old Yale”の原曲が“Brave Old Oak”であり、欧米では「既存の曲を替え歌にして校歌を作る」という手法があり、「都の西北」が“Old Yale”を原曲としていることは恥ずべきことではないと、一件落着した。

#### 8.5 「都ぞ弥生」と「都の西北」の比較

両歌とも歌詞が八七調であること、そして都を基点としたタイトルが類似点であることは先述したが、明治40年代としては、かなり完成された西洋スタイルの楽曲であることも大きな類似点である。しかし、「都ぞ弥生」は同じニ長調でありながら、音階はヨナ抜き（五音音階）である。また、拍子記号を頻繁に変化させる部分（17～20小節目）は、八七調の日本語のフレーズに合うように工夫されたリズムである。

一方の「都の西北」であるが、譜面上はアウフタクトだが、歌唱の実際は「みやこの」と弱拍からアクセントをつけて歌っている。西洋音楽理論に従えば「みやこの」と「や」にアクセントをつけるのが正しい歌い方である。これは作曲家東儀が西洋音楽を指向しながらも、歌唱の段階で学生達に日本化された現象と言えよう。これに対して「都ぞ弥生」は作曲の段階で、洋楽を指向しながらも日本語のリズムや抑揚に寄り添う音楽として作られている。

以上の考察からも、何と言っても大きな相違点は「都の西北」はプロの音楽家と詩人の合作であるのに対して、「都ぞ弥生」は学生達の合作であることだ。そして、学生達が「都ぞ弥生」のような先端的な洋楽スタイルの楽曲を作った土壌となったのが、彼らが歌っていた歌、つまり『寮歌集』であったと考える。

### 9. 結論—欧米の外国人教師による教育環境と恵迪寮『寮歌集』

「都の西北」は作曲の東儀と作詞の相馬が、校歌のモデルやアイディアを求めて、欧米の学生歌を調査して作った歌である。これに対し、「都ぞ弥生」は札幌農学校から続く欧米の影響を色濃く受けた教育環境の中で育まれた学生によって作られた。この〈国際的な教育環境〉こそが「都ぞ弥生」を、他の寮歌や校歌とは異なる予科特有の歌にしたと言えるのではないか。

校歌「永遠の幸」はアメリカの南北戦争時代の Battle Hymn で、農園で働く黒人の労働歌である Plantation Song とも関係があった。寮歌第1号の「一帯ゆるき」は軍歌とフランス国歌を混合した曲であった。そして「藻岩の緑」までの4曲で、一高が確立した寮歌スタイルへと近づいていった。一方でドイツ語と英語の歌が『寮歌集』には収録されていた。明治時代からドイツ人のコーラー先生とアメリカ人のローランド先生は演奏会等で欧米の学生歌を歌い紹介していた。そして“Studenten lied”は予科の学生の為に作詞されたドイツ学生歌の替え歌であり、“Marching song”と“College Hymn”は、アメリカの学生歌調の音楽に、予科の学

生生活、札幌の自然、札幌農学校の歴史と伝統、そしてクラーク博士を源流とする学生のフロンティア精神を詠った詩をのせた歌である。そして何よりも、ローランド先生の英語教科書には、欧米の歌が教材として掲載されていた。

一高や三高にも多くの外国人教師が関わっていたが、彼らの軌跡は寮歌集にはみられない。また一高の音楽会のプログラムにも、外国人教師の名前はない。予科にはクラーク博士以来の外国人教師の活躍や影響力の大きさがあった。『寮歌集』の歌からは、外国人教師の学生達への愛情、札幌と予科への強い思いと共に、学生達の外国人教師への深い尊敬が伝わってくる。

「都ぞ弥生」は当時としては洋楽スタイルの寮歌である。Battle Hymn、Plantation song、そして賛美歌さえ感じ取れる歌である。それは恣意的に〈西洋音楽〉を輸入した歌ではなく、外国人教師による〈国際的な教育環境〉から誕生した歌であった。明治から大正期にかけての恵迪寮『寮歌集』に収録された歌は、既に和洋折衷という域を超え、欧米からの影響を取り入れた、日本における新たな音楽文化の発展の先駆けの証なのである。

(本学准教授＝音楽教育担当)

表1 『北海タイムス』明治44年4月3日の記事「本日の音楽會」を元に筆者作成

第一部		
演目		出演者
一	カレッジソング（校歌）（ユッパイデー）	
二	ピアノ獨奏	ボール、ローランド氏
三	イエーガー氏リード（獵人曲）（独逸語）	ハンス、コーラー氏 学生グリークラブ員
四	三曲合奏（新高砂）	新田、宮永両社中
五	二部合唱（夏ノ夜ノ星）	リープ夫人
六	ハーモニカ独奏	田澤學二氏
七	独唱（精兵）	ローランド氏
八	狂言	
九	男聲の四部合唱（ラインの守り）	ステッドマン氏、コーラー氏、リープ氏、ローランド氏
休息十分間		
第二部		
一	映畫講演（布哇漫遊）	モルガン氏
二	布哇國歌（原語）	
休息五分間		
第三部		
一	薩摩琵琶（城山）	鈴木楓堂氏
二	合唱（村鍛工）	リープ氏
三	廻り歌（三詛の盲目風）	
四	追分	佐藤眠羊氏
五	四部合唱	ローランド氏、リープ氏、コーラー氏、ステッドマン氏
六	三曲合奏（松陰月）	宮永、新田両社中
七	独唱（各國唱歌）	ピアソン夫人
八	ピアノ獨奏	モンク嬢
九	狂言	

表2 A TEXT BOOK OF PRACTICAL ENGLISH の掲載の歌曲

詩のタイトル	掲載頁
AMERICA	pp. 42-43
HOME SWEET HOME	pp. 102-103
BRUCES BATTLE SONG	pp. 137-138
THE MINSTREL BOY	pp. 182-183
ODE from the SPECTATOR	pp. 240-241

## 参考文献

### 【日本語文献】

- 一高同窓会（2004）『寮歌集』一高同窓会
- 旧制高校寮歌保存会（1966）『寮歌は生きている』旧制高校寮歌保存会
- 恵迪寮（1928）『寮歌集』北海道大国大学恵迪寮
- 恵迪寮寮史編纂委員会（1993）『恵迪寮寮史』北海道大国大学恵迪寮
- 三高同窓会（1998）『三高歌集』三高同窓会
- 札幌市教育委員会文化資料室編集（1993）『札幌のコーラス』さっぽろ文庫65
- 下道郁子（2007）「明治時代の第一高等学校寮歌にみる音楽文化活動」東京音楽大学研究紀要 第31集 pp. 33-52
- 下道郁子（2009）「大正時代の第一高等学校の寮歌の研究―旧制高校の教育と音楽的側面からの検討」東京音楽大学研究紀要 第33集 pp.23-41
- 下道郁子（2011）「七大学をめぐる歌―都ぞ弥生, 前編」, 社団法人学士会刊『U7』, vol.41 pp. 64-69
- 下道郁子（2012）「七大学をめぐる歌―都ぞ弥生, 後編」, 社団法人学士会刊『U7』, vol.42 pp. 58-65
- 下道郁子（2013）「寮歌の形成過程と文化的背景―〈花は櫻木〉から〈都ぞ弥生〉まで」東京音楽大学研究紀要 第37集 pp.25-47
- 高橋佐門（1978）『旧制高等学校の研究、寮歌、校風論篇』昭和出版
- 東忠尚（2006）『学生歌とその時代』新風社
- 編集部編（2014）『決定版 軍歌・校歌集』メトロポリタンプレス
- 北海道大学恵迪寮（2011）恵迪寮『寮歌集』
- 北海道大学恵迪寮（1928）恵迪寮『寮歌集』
- 山口哲夫編（1974）『都ぞ弥生』東京エルム会 寮歌委員会
- ラング・長友（1999）『ドイツ学生歌の世界―その言語文化史的断面―』シンフォニア

### 【外国語文献】

- M. F. Armstrong, H. W. Ludlow（1874）*Hampton and its students/by two of its teachers, M.F. Armstrong and Helen W. Ludlow ; with fifty cabin and plantation songs, arranged by Thomas P. Fenner, G. P. Putnam's Sons*
- C. Mcwhirter（2012）*Battle Hymns*, University of North California Press
- D. Roden（1980）*Schooldays in Imperial Japan—A study in the Culture of a Student Elite*, University of California Press
- PAUL ROWLAND,(1916) *A Text Book of Practical English*, 出版者不明
- F. Silcher, F. Erk（1888）*Schauenburgs Allgemeines Deutsche Kommersbuch*, Schauenburg

J.L.Winstead (2013) *College Sang*, University of Alabama Press

H. Schauenburg, M. Schauenburg (1974) *Allgemeines Deutsche Kommerzbuch*, Moritz  
Schauenburg Verlag KG

【その他】

「本日の音楽會」『北海タイムス』明治44年4月3日

「音楽會局外評」『北海タイムス』明治44年4月5日

早稲田大学校歌研究会～協力団体 DVD 『校歌100年～歌い継がれた都の西北の謎～』

Carmina collegens (1876) <https://archive.org/stream/carminacollegens00wait#page/n7/mode/2up> 2018年9月12日閲覧

## 校歌 永遠の幸

納所弁次郎氏選曲

♩ = 88



と こ し え の さ ち、く ち ざ る ほ ま れ、つねに  
わ れ ら が う え に あ れ、よ る ひ る そ だ て、あ け  
く れ お し え、ひ と と な し し わ が に わ に。

Chorus

い ざ い ざ い ざ う ち つ れ て、す す む は い ま  
ぞ、と よ ひ ら の か わ、つ き せ ぬ な が れ、と も  
た れ、な が く と も た れ。

恵迪寮『寮歌集』（2011）P. 2



## 一带ゆるき

♩ = 80 高松正信君作曲

いったい ゆーるき いしかり の、

みなもと とおーく かすみこ め、

ごさい をそむる ゆうやけ は、

ていねの なつ のー はえにし て、

そこに むーげん の、めぐみあーり、

これわが こうのー あるとこ ろ。

Prof. H. Koller


(Jupeidi の 譜)

## STUDENTENLIED

1. Erst kommt der Junge Studio, tralala, tralala.  
Ganz still und scheu nach Sapporo, „ „  
Die erste Zeit wird ihm nicht leicht,  
Den oft das Heimweh ihn beschleicht, Jupeidi..
2. Im Herbst lebt unser Studio, tralala, tralala,  
Vorgut in dulce júbilo, „ „  
Erst Hasenjagd in Koton.  
Und dann zu Nacht Jabiraki, Jupeidi..
3. Im Mai vom schmucken Turnspielring, tralala,  
Schallt lustig es bum, bum, tching, tching, „  
Das ist das Fest vom Undowkai,  
Drum schmettert all: Hurrah; Banzai!
4. Oft hat der Studio nicht viel, Geld, tralala,  
Deshalb ist er nicht schlecht bestellt. „  
O Kashi, Mochi und Manju:  
Verschafft er sich durch Komparas
5. Doch kommen die Examina tralala,  
Da singt er nicht mehr jupeidi, „  
Er sieht so blass und traurig drein.  
Dann wird wohl vom Studieren sein Jupeidi,
6. Ihm wird von all dem Zeug so dumm,  
Als ging im, Kopf ein Muhlrad um.  
Er echst und schauzt so mancherlei,  
Und träumt sogar von Rakudai.
7. Dann in dem Heft steht schwarz auf weiss,  
Wovon der Studio nicht viel weiss;  
Doch kommt zuletzt der Tag herbei:  
So spricht er leikata ga nai

## 628. Urbummellied.

Munter bewegt.



1. Stu-di-o auf ei-ner Rei-s', juch-hei-di, juch-hei-da,  
ganz famos zu le-ben weiß, juch-hei-di, hei-da; immer fort durch  
Dick und Dünn schleudert er durchs Da-sein hin. Juch-hei-  
di, hei-di, hei-da, juch-hei-di, juch-hei-da, juch-hei-di, hei-  
di, hei-da, juch-hei-di, hei-da!

*Schauenburgs*

*Allgemeines*

*Deutsche*

*Kommersbuch*

(1888) P.623より

譜例 5 “ODE from the SPECTATOR” とトニック・ソルファの譜

240

PRACTICAL ENGLISH

*ODE from the SPECTATOR*

The spacious firmament on high,  
With all the blue etherial sky,  
And spangled heav'ns, a shining frame,  
Their great Original proclaim.  
Th' unwearied sun, from day to day  
Does his Creator's pow'r display,  
And publishes to ev'ry land  
The work of an Almighty hand.

Soon as the ev'ning shades prevail,  
The moon takes up the wondrous tale,  
And nightly to the list'ning earth  
Repeats the story of her birth;  
While all the stars that round her burn,  
And all the planets in their turn,  
Confirm the tidings as they roll,  
And spread the truth from pole to pole.

What tho in solemn silence all  
Move round this dark terrestrial ball;—  
What tho no real voice nor sound  
Amidst their radiant orbs be found,—  
In Reason's ear they all rejoice,  
And utter forth a glorious voice,  
Forever singing as they shine:  
“The hand that made us is divine.”

(1712)

Joseph Addison

TONIC SOL-FA

241

Key of F

{s<sub>1</sub> | d :—|—d | r :—|—r | m :d | l<sub>1</sub> :r | d :—|—t<sub>1</sub> :  
{s<sub>1</sub> | l<sub>1</sub> | t<sub>1</sub> :d | r :m | f :—|—m | m :r | r :d | d :—|—t<sub>1</sub> :  
{s<sub>1</sub> | d :—|—d | r :—|—r | m :d | l<sub>1</sub> :r | d :—|—t<sub>1</sub> :  
{s<sub>1</sub> | l<sub>1</sub> | t<sub>1</sub> :d | r :m | f :—|—m | m :r | d :t<sub>1</sub> | d :—|—  
{s<sub>1</sub> | s<sub>1</sub> :—|—s<sub>1</sub> | d :—|—d | r :—|—r | m :—|—  
{r | m :f | s :m | r :m | f :r | m :f | s :m | r :—|—  
{s<sub>1</sub> | s<sub>1</sub> :—|—s<sub>1</sub> | d :—|—d | r :—|—r | m :—|—  
{r | m :f | s :m | r :m | f :r | d :—|—t<sub>1</sub> :—|—d :—|—||

NOTES

- Ode*: a poem expressing exalted feeling, intended to be sung.  
*the Spectator*: a famous newspaper edited (1711-14) by Richard Steele and Joseph Addison.  
3 *spangled*: sparkling, glittering, sprinkled with bright objects, cp. The Star-Spangled Banner,—i.e. the American flag.  
4 *Original*: Origin, Originator, Creator, First Cause.  
7 *publishes*: proclaims, makes known, announces.  
9 *Soon as*=As soon as.  
17 *What tho*: What matter if; What difference does it make tho.  
20 *orbs*: balls, spheres, globes.  
21 *In Reason's ear*: To the ears of Reason; i.e. to the mind of reasoning, rational man.

A TEXTBOOK OF PRACTICAL ENGLISH (1916) pp.240-241



## Marching Song

**Resolutely** ♩ 104 Prof. Paul Rowland

Come all ye men of Sap - po - ro, Come  
sing our far - fam'd col - lege; Our  
hearts a - fire with high de - sire, We're  
here to share her know - ledge: By  
I - shi - ka - ri's migh - ty flood, With  
moun - tains firm de - fend - ing, Give a  
cheer, cheer, cheer Fo - r our mo - ther dear,  
(Broadly)  
Her thou - sand sons be - frien - ding.

譜例 7 “College Hymn”

**College Hymn**

Prof. Paul Rowland

**Heartily** ♩ = 69

Fair Al - ma Ma - ter, this our hymn Of

filial loy - al - ty we chant; A -

midst thy grove of A - ca - deme, In

clois - ter'd qui - et dost thou grant To

ev' - ry ar - dent ear - nest youth Vi -

sions of Beau - ty, Vir - tue, Truth! Vi sions of Beau - ty,

1. 2. 3. (Broadly) 4. (Spiritedly)

Vir - tue, Truth! and for Man!

惠迪寮『寮歌集』(2011) 附録 P. 36



# 都ぞ弥生

Maestoso ♩ = 90~100

赤木颯次君作曲



みやこそ やよいの くもむら さきに、 はなのか



ただよう うたげの むしろ。 つきせぬ おごりに



こきくれ ないや、 そのはる くれては うつろう



いろの。 ゆめこそ ひととき あをき、し げみに、



もえなん わがむね おもいを のせて、



ほしかげ さやかに ひかれる きたを、 ひとのよ



の、 きーよき くにぞと あこがれ ぬ。

\* メトロノームの表示は赤木氏によるものではあるが ♩ = 70 が適当であろう。

恵迪寮『寮歌集』(2011) P. 14

# 早稲田大学校歌

相馬 舞風 作詞  
東儀 鉄笛 作曲

元気をもって

あ や こ の せ い は く わ せ だ の も り に そ  
 び ゅ る い ら か は わ れ ら が ほ こ う わ れ  
 ら び こ ろ の ほ う ふ を し る や し ん  
 し の せ い し ん が く の ど く り つ げ ん  
 せ を わ す れ る く お ん の り そ う か が  
 や く わ れ ら が ゆ く て を み よ や わ せ  
 だ わ せ だ わ せ だ わ せ だ わ せ だ わ せ だ